

9月総評

西躰 かずよし

ねこの耳
に
在る秋風をくすぐって
まださよならがすきだと思ふ

さいう 石川県

誰だって死からは逃れられないし、別離からも逃れられない。おおげさな言い方をすれば、別れは、この世界の本質のひとつだと思ふ。だから作者の「さよならがすき」ということばは、おそらく、そんな世界を受け入れることの表明かもしれない。

そして、「さよなら」の前の「まだ」ということばは、この世界をいつか受け入れられなくなるということを示唆しているようでもあり、世界を受容している語り手の現在を表しているようにも見える。いずれにしても「まだ」に含まれる、こころの揺れこそが作品を生きたものになっている。

花冷えて手術終わりの電話くる

玻璃 愛媛県

「花冷え」は桜の咲くころの急な冷え込みのこと。手術終わりの連絡そのものが、花冷えの印象の中に置かれる。その結果が書かれないのは、必要がないからだろう。描かれるのは、手術が終わるまでの緊迫した時間そのものである。

手術を受けている人が、語り手にとってどれほど大切な人であったかが伝わる。

子ども食堂の裏手の誘蛾灯

小里京子 北海道

虫の駆除に使われる誘蛾灯。生きていくためには、殺すことも止むを得ないということそれは思い起こさせる。確かに、生きることは汚れることなのかもしれない。向日的な子ど

も食堂という営みのなかにあって、誘蛾灯のひかりは、おごそかに夜の食堂を照らしつづける。

同じ作者の作品に「ストローがまだ夏を向く新学期」や「血管の内側にあの日から残雪」といったものがあるが、いずれも安定感のある作品である。

クルトンのような一言小鳥来る

深町 明 福岡県

クルトンはサラダやスープに入っているサイコロ状のパンだけれども、食べるときのさくっとした食感が楽しい。噛み応えのないものの中に不意に現れる食感。

たった一言が人生を変えるようなこともあるけれども、作中の一言は、語り手にとって、きっと目を覚まさせるようなものだったのだろう。小鳥来るという季語が、そのことばと出会ったときの驚きをうまく表している。

ヘアクリップいっぱい秋の髪

有野 水都 東京都

ヘアクリップに束ねられている髪の毛。ただそれだけの情景だけれども、「いっぱい」という修飾が、語り手のうきうきとした気持ちを表している。お弁当箱いっぱいのおかず。両手いっぱいのおやつ。ささやかなもので何かを満たすこと。ヘアクリップいっぱいの髪の毛は、いつかの大切な時間を思い出させてくれるに違いない。

夏の空置きっぱなしでプール閉め

花野 木春 東京都

最近はそうでないかもしれないけれども、プールと言えば子どもの頃の夏の楽しみのひとつだった。その終わりは夏休みの終わりへとつながっていた。「置きっぱなしで」という一節は、そのことを思い起こさせる。プールを閉じるさびしさと、季節の終わりと。作品は、読み手を、かつての夏へと運んでくれる。

雨の降る夜のカフェラテ
水死体

橋詰 桜京 東京都

夜のカフェラテから水死体までのイメージの飛躍。それは、語り手の危機意識の表出と言ってもいいだろう。日常のとなりにある非日常。それを敢えて書くことを選んだ理由は、書き手の悲劇への憧憬によるものだろうか。

面砲ばかりの君の顔が好きでした
チューリップ

金光 舞 埼玉県

にきびは、きれいなものじゃないけれど、そんな顔の君が好きだと、こんなにも簡単に言ってしまうののだろうかと思う。それからチューリップという春めいたことば。

けれども、こうも簡単に言ってしまうから、そのことばを信じられるのかもしれない。それは、たとえ未来を担保するものではないとしても、その時の気持ちをまっすぐに表している。たぶん、それで十分なんだと思う。

海からの借り物として
球体のように私を
撫でる母さん

常田 瑛子 山口県

母と私との微妙な距離感が「借り物」ということばで表される。二人のあいだに横たわる棘のようなもの。それでも「球体のように」撫でるといふ母の行為は、せつない愛情そのもののようにも見える。

けれども、それは、子どもの本質には決して届かない、とおい母親の存在を表現しているのかもしれない。

ドア開くたびに休暇明けの匂い

神崎まい 群馬県

ドアを開くたびに休暇明けの匂いがするという。ひとときの休暇から、日常へと帰っていくときに感じる息がつまりそうな匂い。普通ドアが開くと聞けば、次の一步を想像するけれども、ドアを開くたびにを見つけるのは、代わり映えしない毎日と休暇明けの匂いでしかない。出口のない日々の閉塞感が簡潔なことばで表現されている。